

昭和61年8月4日 『台風10号』による

# 小貝川大水害から20年

昭和61年8月の小貝川大洪水から今年で20年。150年に一度の大洪水といわれ、その被害は、旧下館市の面積の4分の1を冠水させ、下流の旧明野町でも谷原、大林地区など小貝川沿いの地域を泥水の海に変えました。かつて経験したことのない大きな被害に私たちは改めて自然の猛威を思い知らされました。20年の節目を迎え、当時の被害の状況と復興のあゆみを振り返ります。

7月31日、フィリピン東海上で発生した台風10号は980hPaという大きな勢力を保ったまま関東に上陸、8月4日、私たちの住む筑西市を直撃しました。昼ごろから降り始めた雨は、わずか24時間で300ミリを超える雨量を記録しました。雨量レーダーによれば、小貝川流域の上空の雨雲が約6

時間にわたって、ほとんど動かなくなつたという記録が残されています。

この大雨によって、小貝川の水位はみるみる上昇し、堤防をつくる際の基準となる計画水位を、ほぼ全川にわたって越え、濁流となり、辺りを泥の海へと変えていきました。

小貝川の越水は上流部の無堤部分からはじまり、旧下館市の約4分の1を冠水させました。特に小貝川と勤行川、小貝川と大谷川とが合流する地域では大きな被害を受けました。

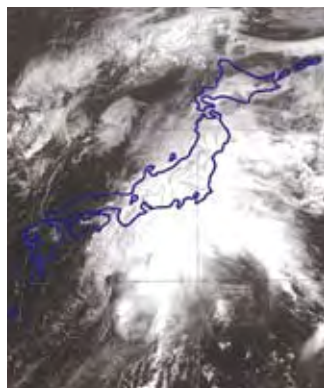
さらに下流部でも次々と洪水が発生し、8月5日午後には筑西市南部の赤浜地区（旧明野町）の堤防が決壊。濁流は津波のような勢いで約5km北上し、谷原・大林地区などに押し寄せ、大きな被害をもたらしました。

さらには下流部でも次々と洪水が発生し、8月5日午後には筑西市南部の赤浜地区（旧明野町）の堤防が決壊。濁流は津波のような勢いで約5km北上し、谷原・大林地区などに押し寄せ、大きな被害をもたらしました。

◀屋根の上に取り残された人を救出（嘉田生崎地区）  
台風10号による雨は瞬く間に民家に浸水し、逃げ遅れた人たちはボートで避難しました。



## 小貝川決壊



激しい雨を降らせた台風10号の画像  
昭和61年8月4日『気象衛星ひまわり』撮影



勤行川の氾らんによって冠水した県道下館・つくば線（旧下館市大和町）



◀▲決壊した小貝川の堤防（赤浜地先）

この後、濁流は北上し、谷原、大林、東保末、海老江地区に襲いかかった。（手前が下妻市、奥が旧明野町。白く見えるのが県道下妻真壁線・旧小貝橋）



最も被害の激しかった、小貝川と大谷川 ▶ の合流部分（現在の母子島遊水地付近）南側の無堤防部分から水が流入し、冠水した母子島・飯田・一丁田・椿宮・小釜集落



小学校での避難生活と水害ごみの搬出 ▶ 救出され、小学校で不安な日々を過ごす市民（左） 水に浸かった畳や家財道具などの水害ごみは、ダンプカー約3,000台分にもものほりました（右）



▼ヘリコプターによる救助（中根） 孤立した住民を救出するため、自衛隊にヘリコプターの派遣を要請。自衛隊、東京消防庁などから6機が救出活動を行う



台風10号の爪あとはすさまじく、この大水害によって筑西市内は大きな被害を受けました。  
 下館地区で床上浸水1373戸、床上浸水884戸、明野地区で床上浸水269戸、床下浸水228戸に達し、下館地区の養蚕小学校でも床上まで浸水しました。停電や電話の不通も市内各所で発生しました。  
 また大水は、水稲をはじめたばこや大豆など農作物にも大きな被害をあたえ、農機具や農業用施設などを合わせると、筑西市内だけでも被害額は50数億円にのほりました。  
 さらに、市内の主要な道路や橋が各所で損壊し、救助や救援物資の移動の妨げとなったり、JR水戸線では鉄道敷が水圧で流失するなど長期間にわたって、交通網にも大きな被害をもたらしました。

# そして復興へ

観測史上最悪の被害を受けた小貝川は、昭和61年9月、建設省（現在の国土交通省）の直轄河川激甚災害対策特別緊急事業（通称・激特事業）の採択を受けました。この激特事業では主に、小貝川中流部約10kmの堤防補強、小貝川大橋の架け替え工事、そして母子島遊水地の建設が行われ、総事業費

208億円、工期が5か年という大規模かつ緊急の事業でした。

中でも母子島遊水地建設は、地区内に点在していた5つの集落（母子島・飯田・一丁田・椿宮・小釜）を集団移転させ、遊水地内に新たなまちをつくるという、全国でもはじめての事業でした。そして平成3年、代替地や補償



▲激特事業によって完成した『母子島遊水地』（上）洪水時に小貝川の水かさがある一定の高さになると、ここに水が溜め込まれます。右下は造成中の『旭ヶ丘』。左下は安心して暮らせる旭ヶ丘の街並み。

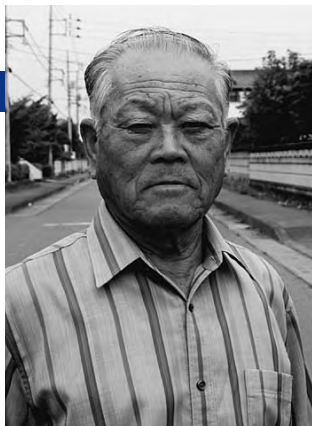
などさまざまな問題を解決し、住民の理解と熱意によって新たなまち『旭ヶ丘』が完成しました。旭ヶ丘の面積は、道路・公園などを含めて14・4畝。上下水道や集会所・公園も整備され、109世帯の住民が安心して暮らせるまちが誕生したのです。

また、集落の移転によってできた跡地を含む160畝が堤防で囲まれ、遊水地が完成しました。遊水地のはたらかしは、洪水によって小貝川が増水したとき、越流堤から増水した水を遊水地へ導き入れて、溜め込むのです。そして、洪水の危険が去った時点で、小貝川に水を戻してやることにより、下流への水量を減らし、小貝川全体の安全性を高めます。母子島遊水地は、500万<sup>3</sup>mの水を溜め込むことができます。



みなさんのおかげで、安心して暮らせます。

旭ヶ丘自治会長 仁平江一さん



無堤部分から逆流し、迫ってくる水を見たときは、津波とはこういうものかと思いました。集落の水道施設が冠水し、市に給水を要請しましたが、「給水車が大水のためにたどり着けない」との連絡を受けたとき、今までの洪水とは違うなと感じました。明るくなつてからの出水でしたので、人的被害がなかったのが不幸中の幸いでした。

私の住んでいた一丁田集落の人たちは、激特事業の指定を受け、旭ヶ丘へ安住の地を求めることができました。新しいまちづくりは大変な事業でしたが、住民の心が一つなり、短期間に事業を完成することができました。今では安心して生活することができ、ご尽力くださいました皆様に感謝申し上げます。

# 災害に強いまちをつくる

筑西市には、小貝川、鬼怒川、勤行川、桜川、大谷川など多くの河川が流れ、豊かな恵みを私たちに与えてくれています。時として、私たちの想像を超える猛威をふるってきました。

昭和61年8月の大水害からちょうど20年が経過し、改めて行政と市民が災害の悲惨さと防災の大切さを認識しようとして「防災・減災フォーラム2006 IN茨城」が、8月4日、スピカコミュニティプラザで開催されました。

NHK解説委員の山崎登さんの基調講演に続き開催されたパネルディスカッションでは、富山省三市長、ポ



安全で安心して暮らせる  
まちづくりに取り組む

富山省三 筑西市長

ランティア連絡会の関根静子会長、富田宏司消防団副団長、国土交通省下館河川事務所の下館河川事務所成田所長のコ

メントを紹介し

富山市長 現在

の取り組みとしては、地域特性を十分に考慮した、新たな『地域防災計画』の整備を進めています。また、『筑西市水防訓練』を毎年開催し、水防技術の習得と水防意識の高揚を図っています。さらに、内水による冠水被害を減らすために、『エンジン付き大型排水ポンプ』の配備を年次計画で進めています。

水害に強いまちづくりへ向けて、今年度中に『洪水ハザードマップ』を作成します。これは洪水時の危険な箇所や浸水が予想される箇所などを地図上に表し、あわせて避難場所や避難経路などの情報を盛り込んだものです。また、「自分たちの地域は自分たちで守る」という観点から、自治会やボランティアなどを母体とした『自主防災組



情報は予防につながる

国土交通省下館河川事務所  
成田 一郎 所長

織』づくりを積極的に推進していきたくて考えています。

成田所長 現在進めている河川整備の面からお話すると、まず小貝川に架かるJR水戸線の橋桁が川の流れの障害要因となっているため、平成21年までに架けかえます。また、万が一小貝川の堤防が切れた場合に備えて、川のそばに資材などを備蓄しておく『防災ステーション』を整備していきます。普段は公園や広場として利用しますが、いざというときには、地中に埋められたコンクリートブロックを使って堤防を閉めたり、司令基地として利用したりします。

防災という面では、情報の提供に力を入れていきます。これまでのわかりにくかった情報を見直し、受け手側の立場に立った情報提供に努めます。また、情報は災害の最中に出すだけではなく、普段からの情報がとても大切です。浸水地域や避難場所を記した『洪水ハザードマップ』を作成し、筑西市と連携しながら、学校や自主防災組織などで、繰り返し説明会を行っていきたくて考えています。

## 『防災・減災フォーラム2006 IN茨城』

### 悲願の排水ポンプが完成し、安心して生活できます。

古内自治会長 渡辺 弘さん



古内地区は昔から内水に悩まされてきましたが、昭和61年8月の大水の時は、堤防を越えて水が集落に入ってくるという、大変怖い体験をしました。

また、集落の水道に泥水が入り、大腸菌が検出され、約半月程度飲むことができず、水の確保に大変苦労しました。

その後は堤防のかさ上げなどにより、小貝川の水に悩まされることはなくなりましたが、内水の被害は相変わらず解消されませんでした。しかし今年7月に念願の排水ポンプ施設が完成し、集落にたまった水を小貝川へ排水できるようになりました。これから台風の季節を迎えますが、大雨にも安心して過ごすことができます。関係者のみなさまありがとうございます。